

adhimutti と adhiṭṭhāna

——思いを実現させる働きの視点の提示——

古 川 洋 平

本論では、パーリ文献に使用されるサンスクリット語 *adhi-√muc* を語源とする語の（パーリ語の名詞形 *adhimutti*, *adhimokkha* [Skt. *adhimukti*, *adhimokṣa*]. 漢訳「信解」「勝解」等. 以下、本語一般を「A」「A する」と表記する）、時に *adhi-√sthā* 由来の語に関連付けられる性格について一考する。

1. 思いを実現させる働きの視点の提示 A は多義的な側面をもつ語である (Cf. 櫻部 1997). 試みに NPED s.v. *adhimuccati* を参照すると, 1. *inclines to, believes, is sure of, is convinced*; 2. *concentrates on, pervades (in thought or meditation), wills (magically)* ([神秘的に] しようと思う), *changes (by magic)* ([神秘的な力により] 変化させる); 3. *enters another's body* (⇒第3節) とある。

上記下線部に関して、CPD s.v. *adhimuccati* (d) は *to make a (magical) act of volition* を設定し、同辞書の s.v. *adhiṭṭhāti* (g) と同義に解す。 *adhiṭṭhāti* はサンスクリット語 *adhi-√sthā* に由来し (名詞形は *adhiṭṭhāna*)、心的行為としては「思い定める」「心に向ける」「決心する」「集中する」などを意味する。本語は A と共通する意味領域をもつが¹⁾、「加持」と漢訳され、神秘的な力によって「変化を引き起こすこと」「超自然的な現象を生ぜしめること」とも解されている (渡邊 1977, 84-85)。この点を端的に示す例として、CPD、NPED には次の Vin の用例が挙げられている。

atha kho āyasmā Pilindavaccho rañño Māgadhasa Seniyassa Bimbisārassa pāsādaṃ suvaṇṇan ti adhimucci, so ahosi sabbasovaṇṇamayo. (Vin I, p. 209, III, p. 250)

すると尊者ピリンダヴァッチャはマガダ国王セーニヤ・ビンピサーラの高殿を「黄金である」と A した (思い描いた)。それ (高殿) はすべて黄金製のものとなった。

上掲例では、阿羅漢であるピリンダヴァッチャがビンピサーラ王の高殿を「黄金である」と A した結果、実際に高殿が黄金になっている。註釈は *adhimucci* を「思い定めた」(*adhiṭṭhāsi*) と説明する (Sp p. III, 709)。

BHSD s.v. *adhimucyate* は本 A を NPED と同じく *changes by magic* と解す。しかし近年 Benedetti 氏が BHSD の理解に疑義を呈し、上掲例の A に *transformative power*

(変化させることのできる力)を認めつつも to conceive, contemplate の意味を設定している (Benedetti 2019, 24–26). 氏が指摘するように, A 6.41 では神通力 (iddhi) を有する比丘が木の塊を「地である」等と A するものの, 実際に地などに変化しているわけではない (A III, pp. 340–341). 上掲例では, A (思い描く) が阿羅漢の有している神秘的な力 (神通力) によるイメージの具現化と一体化する形で表現されたものと推察される²⁾.

A が直接「変化させる」(to change) を意味せずとも高殿が黄金に変化するのであれば, 他の状況で用いられる A にも, イメージを現実のものとするような側面を指摘出来るのではないだろうか (Cf. 芳村 1987, 55–56). 以下本論では, 今少し広い視野に立つことで, パーリ文献中の A を各人の持つ能力の中で思い描いた意図や願望, イメージなどを現実のものとして成就していく作用, 即ち「思いを実現させる働き」をもつ語として捉え直してみたい.

2. 善趣への転生に寄与する A A 8.35 は, 8つの布施による再生をテーマとしている. 本経では沙門・バラモンに布施する者がそれぞれ8つ善趣への転生を願う. 次の記述はそのうちの梵衆天に関する部分である.

… so taṃ cittaṃ dahati, taṃ cittaṃ adhiṭṭhāti, taṃ cittaṃ bhāveti. tassa taṃ cittaṃ hīne 'dhiṃuttam'³⁾, uttari abhāvitam, tatrūpapattiyā samvattati⁴⁾. kāyassa bhedaṃ paraṃ maraṇā Brahmakāyikānaṃ devānaṃ saḥavyataṃ upapajjati. (A IV, p. 241)

(釈尊)「……①彼(梵衆天への転生を願う者)はその心を置く. 彼はその心を思い定める (adhi-√sthā). 彼はその心を修習する (生じさせる). ②彼のその心が劣ったもの(梵衆天)に A すると(志向すると), さらに修習されなければ, そこ(梵衆天)に生じるために働く. 彼は身体の破壊から死後に梵衆天と共にある状態に至る (梵衆天に生まれる).

上掲例は梵衆天の事例であるが, 他の転生先の場合もほぼ同様である. 転生を望む布施者は心を置き, 思い定め (adhi-√sthā), 修習するが(下線部①), 彼の心が劣ったもの (= 梵衆天) に A すると梵衆天への転生に作用し⁵⁾, 梵衆天への転生が現実のものとなっている(下線部②). 本例は, 仏や阿羅漢でない人物の A にも, 思いを実現させていく作用が認められることを示す例と言える. ただし, 本例の直後に戒を具え, 熱望を離れた者が梵衆天への転生を成就するとされており, 梵衆天への転生の直接的要因が A とされているわけではない (Cf. Mp IV, p. 126).

善趣への転生に関する A の事例に注目すると, 先に取り上げた阿羅漢ピリンダヴァッチャの場合のように高殿が直接黄金に変化するわけではないが, 特殊な能力を持たない人間の A にも, 思い(願望)を実現させる働きが指摘出来る.

3. *saṅgāra / kāye A* (身体に入り込む／とりつく) 次に、冒頭で言及した NPED s.v. *adhimuccati* の意味 3. enters another's body (他者の身体に入る) にあたる、*saṅgāra / kāye A* を取り上げる。本用法は註釈文献以降に使用される。用例は 20 数例であるが、A する者は夜叉、ガンダツバの他、魔、神格、帝釈天、菩薩など超人的な能力をもつ者達の多岐にわたる。

D 32 では、夜叉などが邪な心で常に四衆の側にいれば、「この夜叉が擱んでいる (*gaṅhāti*)。この夜叉が入り込んでいる (*āvisati*)」等と彼等に不満が言われるべきであると説かれる (D III, p. 204)。これに対し註釈は聖典中の「擱む」(*√grah*) を *saṅgāra A* で説明し、さらに「入り込む」(*ā-√vis*) の同義語と解す (Sv III, p. 970)。次の用例はこの部分に対する複註の説明である。

saṅgāra adhimuccatī ti saṅgāraṃ anupavisitvā viya āvisanto yathā gahitakassa vase na vattati, attano eva vase vattati, evaṃ adhimuccati adhiṭṭhahitvā tiṭṭhati. ten' āha āvisatī ti tass' eva vevacanam ti. (Sv-pt III p. 209 Cf. Spk-ṭ (Be) I, p. 167)

saṅgāra adhimuccati とは、身体に侵入したかのように入り込み (*ā-√vis*)、① [身体を] 擱まれた者 (*√grah*) の力のもとで働かず、他ならぬ [擱んだ者] 自身の力のもとで働く、② そのように A して (入り込んで、心を決めて)、思い定めて (*adhi-√sthā*)、立つ。それ故に *āvisati tass' eva vevacanam* という。

上掲例は *saṅgāra A* に対する説明に「擱む」「入り込む」を用い、「擱まれた者」、つまり *saṅgāra A* された者を A した者 (擱んだ者) の思い通りに動かすことと説明する (下線部①)。そしてこの A は、*adhi-√sthā* とも言い換えられている (下線部②)。下線部①の *saṅgāra A* は、他者の身体に入り込む (擱む) だけではなく、その身体を思いのままに操作できるようにすることを含意している。本用法は心的行為としての A とは毛色が異なるものの、本語の思いを実現させる働き的一端を指摘することができる。

上に取り上げた事例以外の註釈文献に見られる *saṅgāra A* の事例を簡潔に整理すると、次の 2 つに大別できる。

① *saṅgāra A* の後に使役形 (*caus.*) を用いて何らかの行為をさせる

① -1: 住処を建てることに心を向かわせる (Sv II, p. 540, Ud-a p. 421, Sp V, p. 1095); ① -2: 首を回転させ、倒れさせる (Spk I, pp. 306-307 ad. S I, p. 208 *gahito*; Dh-p-a IV, p. 20, 170); ① -3: 石を取らせ投げさせる (Ps II, p. 420 ad. M I, p. 336: *anvāvisitvā*); ① -4: 別の者を死なせる (Mp I, p. 282, Ap-a pp. 513-514)。

② sarīre A の後に当人として行為する

②-1: 語る (Ps II, p. 415 ad. M I, p. 330: anvāvisitvā ⇔ Ps II, p. 405: sarīraṃ pavisitvā; Mp I, p. 383, Ja-a V p. 103 ⇔ p. 102: adhiggahito; Ja-a V, p. 429); ②-2: 偈を唱える (Spk I, p. 127 ad. S I, p. 67: anvāvisitvā; Ja-a IV, p. 272); ②-3: 笑い踊り戯れる (Dhp-a I, p. 196, Dhp-a III, p. 102, pp. 257–258).

註釈文献に見られる sarīre A は、聖典中の人物に「入り込む」([anu-] ā-√vis), 「摺む」(√grah) 記述に対応する部分に使用されている⁶⁾。他者の身体に A した者は、各人の目的に応じて心的行為も含め思うがまま他者を行動させ (⇒①), 時にその人物当人として振舞う (⇒②)⁷⁾。A された者〔達〕が行う諸行為は、A した当人の行為である⁸⁾。

4. **adhimuttikālakiriya** (adhimutti による死去) 最後に、同じく註釈文献の事例として **adhimuttikālakiriya** (adhimutti による死去) を取り上げたい。Sv は D 14 で過去仏の一人となるヴィパッシン菩薩が兜率天から母胎に降下する記述に対し (D II, p. 12), ヴィパッシン菩薩が仏になる条件をすべて満たして兜率天に生まれ寿命の限りそこに止まるが、未だ波羅蜜を満たしていない菩薩達は別の天界では波羅蜜を満たすことが難しいので、**adhimuttikālakiriya** によって人間道に生まれると説明する (Sv II, p. 427)。本語に対し複註は次のように説明を加える。

idān' eva me maraṇaṃ hotū ti adhimuccitvā kālakaraṇaṃ *adhimuttikālakiriya*, taṃ bodhisattānaṃ ye va, na aññesaṃ. bodhisattā kira ... tadā vimānaṃ pavisitvā akkhīni nimmittevā⁹⁾, ito uddhaṃ me jīvitāṃ na ppavattatū ti cittaṃ adhiṭṭhāya nisīdanti, cittādhiṭṭhānasamanantaram eva maraṇaṃ hoti. pāramīdhammānaṃ hi ukkaṃsappattiyā tasmim-tasmim attabhāve abhiññāsamāpattīhi santānassa viśesitattā attasinehassa patanubhāvena, sattesu ca mahākaraṇāya ulārabhāvena, adhiṭṭhānassa tikkhavisadabhāvāpattiyā bodhisattānaṃ adhippāyā samijjhanti. citte viya kammesu ca nesaṃ vasībhāvo, tasmā yattha upapannaṃ pāramiyo sammad-eva paribrūhanti, vuttanayena kālaṃ katvā tattha upapajjanti. (Sv-pt II, p. 25 ⇔ Ps-t (Be) II, 332)

①「他ならぬ今ここで私に死が生じよ」と A して (心を決めて) 死去することが **adhimuttikālakiriya** である。これは諸菩薩にのみあり、他の者達にはない (Cf. Ps IV, pp. 169–170.)。伝え聞くところでは、菩薩達は…… (中略) ……天宮に入った時に両目を閉じて、②「これ以上、私の命が働くな」と心を思い定めて (adhi-√sthā) 坐る。③心を思い定めた直後に死が生じる (死去する)。④というのも、〔諸菩薩は〕諸の波羅蜜法を最大限獲得するために、それぞれの自己存在において神通や等至を通じ相続を特別なものとして、自己に対する愛着がきわめて薄くなることにより、また衆生達に対する大悲が広大になることにより、**adhiṭṭhāna** の鋭く明瞭な状態を獲得しているので、諸菩薩の諸の意図が成就するからである。⑤この者達は心と諸行為について自在であるかのようであり、それ

故に、そこ（人間道）に至った者達の諸波羅蜜が正しくすっかり増大するところ、そこに前述の方法で死去して至る（生まれる）。

複註は A を adhi-√sthā に言い換え両語の内容を明示しており（下線部①②）、「他ならぬ今ここで私に死が生じよ」「これ以上、私の命が働くな」という adhimutti = adhiṭṭhāna の直後に死が現実のものとなっている（下線部③）。adhimuttikālakiriya が成立する理由は、菩薩達が諸波羅蜜を満たすために生死を繰り返す中での修行を通じ adhiṭṭhāna が鋭く明瞭になり、菩薩達の意図が成就するからである（下線部④）。菩薩達は心や諸行為について自在であるかのようにであると説明されている（下線部⑤）。

上に提示した adhimuttikālakiriya の例は、A のもつ思いを実現させる作用を生死の視点から示していると言える。adhimuttikālakiriya は菩薩に限定されるものであるが、菩薩の adhimutti が当人の思い通りの死や転生を直後に示現出来るのは、菩薩がそれまでに自身の意図を成就出来るだけの修行実践を経ているからである。

5. まとめ 以上、ピリンダヴァッチャの事例を手掛かりとして、「思いを実現させる働き」をもつ語として A を捉える視点の提示を試みた。①パーリ聖典に見られる善趣への転生に関して使用される A には、望む転生の実現に寄与する側面が指摘できるものの、転生を直接実現するものはあくまで実践である（第2節）。註釈文献に目を向けると、② sarīre A のケースでは夜叉や魔、菩薩などが A することで他者を自身の思い通りに操作できる状態にしており（第3節）、③ adhimuttikālakiriya のケースでは菩薩が直後に死去して意図通り人間への転生を実現させている（第4節）。②③は A が思い通りの状態や結果に直結している点で①と相違するが、ピリンダヴァッチャの事例も含め、A そのものに思い（願望、意図、イメージ等）を現実のものとしていく働きが認められる点は共通するものとする。

1) A と adhi-√sthā の関連性については Schmithausen 1982, 606–608 も論及している。

2) Kv は諸仏や声聞達に意図通りになる神通力 (adhippāya-iddhi) があると主張するアンダカ派との議論の中でピリンダヴァッチャの事例を取り上げる (Kv pp. 607–608)。この議論では、諸仏や声聞達が無常のものを恒常のものとするような意図通りになる神通力を有する点については否定されるものの、ピリンダヴァッチャが A により高殿を黄金に変えたことが神通力の行使である点は否定されていない。その他 cf. S I, p. 116, Spk I, p. 181, Vism p. 176, HOS 版 p. 142, Vism-mhṭ (Be) I, p. 198. 3) Ee Se hīne 'dhi-; Be Ce hīne vi-. Mp IV, p. 126: Ee Be vi-; Se adhi-. 本例パラレル D III, pp. 258f. (Ee Be Se vi-. Ce adhi-. Ee の諸異読 adhi-)。複註は当該語を A の意味で解す (Sv-pt̄ III, p. 340, Mp-ṭ (Be) III, p. 237)。

vi-√muc と A の交代・混用については cf. 櫻部 1997, 38–39; 古川 2019, n. 21; 古川 2021, n. 8 も参照のこと。4) Ee Se omits tatrūpapattiyā samvattati. Be にはあり。Mp はこれに

註釈を附す。Ee の異読 (M = Mandalay collection) 及びパラレル D III, p. 258 にもあり。Be の読みを採用する。

5) A と共に使用される hīna (劣ったもの) については cf. 古川 2021.

6) $\sqrt{\text{grah}}$, $\text{abhi-ni-}\sqrt{\text{viś}}$ との併用は既に Nidd に認められる (Nidd I p. 76 etc.). NPED 等が提示する訳語 *to enter [into]* について、A がもつ対象に固着する側面 (Cf. 古川 2019, 30–32), Ja-a IV, p. 272 の事例の後に「すると帝釈天は祭官長の身体から離れて……」(Ja-a IV, p. 274: *atha sakkō purohitassa sarīrato apagantvā ...*), Dh-p-a IV, p. 20 の事例の後に「夜叉は沙弥を解放した」(Dh-p-a IV, p. 22: *yakkhiṇī sāmaṇeraṃ muñci*) とある点を踏まえると (その他 cf. Dha-a IV, pp. 170–171),むしろ「とりつく」ほどが相応しいかもしれない。

7) その他特殊な例として, Sv III, p. 822 では釈尊が死者を「アスラの母胎から連れて来て, [もとの] 身体に A させて語らせた」(*asurayonito ānetvā sarīre adhimocetvā kathāpesi*). 本例は sarīre A が外的行為として機能していることを示すか。その他注 6 に示している sarīre A の状態を解除する表現を参照のこと。

8) Ps II, p. 418 では, 魔が sarīre A すると自身の不善となるので別の方法で仏達を妨害している。本例は sarīre A して行動することが, A された人物ではなく A した本人の行為と見なされていたことを示す (Cf. 「今や自分の手で近づこうと欲して……」(Ps II, p. 420: *idāni sahatthā upakkamitukāmo ...*)).

9) Ee *nimmīletvā*; Be *nimīletvā*. Ee の誤植と考え *nimmīletvā* と読む。

〈略号〉

パーリ語テキストは Pali Text Society (PTS) 版を底本とし, PTS 版がないものについてはビルマ (Be) の第六結集版 (Vipassana Research Institute (VRI) の Chaṭṭha Saṅgāyana CD の電子データ) を使用している。パーリ文献および辞書類の略号は Margaret Cone, *A Dictionary of Pāli* (NPED) の Abbreviations に従う。

〈参考文献〉

本来であれば以下に提示する参考文献以外にも言及すべき先行研究が多数存在するが, 紙数の関係上, 必要最低限の提示にとどめている。

Benedetti, Giacomo. 2019. “The Etymology and Semantic Spectrum of *adhimukti* and Related Terms in Buddhist Texts.” *Buddhist Studies Review* 36(1): 3–30.

Schmithausen, Lambert. 1982. “Buchbesprechungen: *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden*. Begonnen von Ernst Waldschmidt. Hrsg. von der Akademie der Wissenschaften in Göttingen unter der Leitung von Heinz Bechert. Lfg. 1: a-, an- / antar-vāsa. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1973.” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 132: 407–411.

櫻部建 1997 『増補版 佛教語の研究』文栄堂書店。

古川洋平 2019 「パーリ文献中の *saddhādhimutta* について——第一人者の伝承に基づく訳語の検討——」『パーリ学仏教文化学』33: 21–38.

—— 2021 「パーリ文献中の *adhimutti* について——*hīnādhimuttika* / *hīnādhimutta* の事例から——」『パーリ学仏教文化学』34: 85–98.

芳村博実 1987 「信解 (*Adhimukti*) の対象となる仏陀 (*Buddha*)」『日本佛教学会年報』53: 51–66.

渡邊宏宏 1977 「*Adhiṭṭhāna* (加持) の文献学的試論」『成田山仏教研究所紀要』2: 1–91.

〈キーワード〉 *adhimutti*, *adhimokkha*, *adhiṭṭhāna*, 信解, 加持

(創価大学准教授, 博士 (文学))